

こぶし

第10号



上越こぶし山の会

◆◆◆ も く じ ◆◆◆

登山について	—————	木島忠彦	— 1
登山戦術	—————	木島忠彦	— 2
火打集中登山			
妙高連峰・雨飾山概念図	—————		— 3
文化の日の焼山	———	田中 進	— 4
高谷北より妙高へ	———	高橋直子	— 6
妙高 火打山登山	———	橋本 歩	— 8
立山の七雲	———	諸国望人談より	— 9
戸隠冬山訓練に参加して		白清光子	— 11
糖ヶ岳山行	—————	山崎昭雄	— 12
私という人間	—————	飯塚八重子	— 15
事故発生の場合の連絡事項	〈禮部〉		— 16
新婚さん	こんばんは —— 杉本事務局長の巻		— 17
アンケート集約報告	———	〈企画部〉	— 19
詩……山の花	—————	丸山三夫	— 25
おとがき			

登山について

木島 忠彦

安全登山を行う為には、次の三項目がいかにバランス良く、登山者の中に育っているかにかかっていると考ふる。

(一) 登山に対する考え方、心がまえ(登山思想)
(二) 登山に必要な技量と体力(登山技術と体力)

(三) 登山に必要な科学的知識(登山の科学性)

このうちどれが欠けても、又弱くとも登山行は、非常に危険なものとなるだろうと思う。そこで(一)登山思想のうち一部分を考えてみよう。

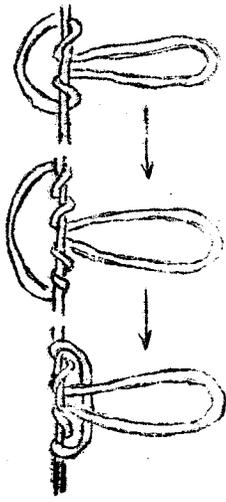
登山者が登山をどのようにとらえているか、と云う事は安全登山、遭難防止面より考え、非常に重要な事である。登山を、より困難で、危険、スリルを求めて行うものだとか、社会生活の圧迫から逃避するための、記録を作る、英雄主義的な姿勢で、行っているものたり、それは誤りだと思ふ。登山はスポーツである。スポーツは己を成長させ体力、精進

力、技術、知識を高める事に考え込んでいる人間の高度の文化だと考ふる。登山も同様に、社会生活の中で好むと、好まざるにかかわらず、お会いであらう、困難、危険を乗り越えてゆく力を高めるものである。登山は、昔後に社会生活があるからこそ、行うものであると思ふ。

登山は、我々の生活、文化を向上させる考へ方からすれば、まづ一番大切な事は「生命を大切にすると云う事である。雑談等でも、山で死んだら本望だ」などと冗談を云う人が居る……こんな考へは誤りだと思ふ。もし他のスポーツで生死をさまようような事態が起きたとしたら、どんな事になるだろう……。それなのに何故登山では、それが許される様な事にならざるのか……。登山中の危険をより安全向へ、困難をより容易側に持たせて、その努力をすること本当のスポーツとしての登

中で、私達が考ふる登山ではないだろうかと思ふ。登山は、人間尊重の思想である。登山を行う事によつて、未来のこれを成長、発展させる一構成部分となる。しかし、これによつて死んでしまつたなら未来に對しての生活も豊かにすべき可能性が失われしてしまう。夜長時相列車待ちをして、睡眠不足で登山をする、普段の体調を維持するのではなく、悪くして山へ入る。他にこんなスポーツがあるだろうか、休むこんな事をしなければならぬのだろうか？

プルージック



あがり

登山戦術
 木島 忠彦

登山者は、登山行爲の成功とその行爲中の事故防止のために、企画準備、実施のそれを此の段階で戦術を明確にしておかなければならない。

企画にあつては、パーティーの編成、コースルートの知識などについて考ふる。

登攀するコースにふさわしいパーティーを編成すると共に、そのパーティーの長所と短所についてパーティーのメンバー全員がこまかく認識する必要がある。パーティーが先に編成されていゝる時には、それにふさわしいルートを選定し、よくてはいけぬ。準備にあつては、その登攀ルートにふさわしく適合する食糧や装束について研鑽しなくてはいけない。

実施にあつては、出発や休憩や、オ・ガーについて検討する必要がある。

それからすべて成功と事故防止の線点をすべてである。

火打集 中登山

十一月三日の文化の日に火打に登る人が多い。文化の日の火打は雪で白く霧化極する事が多く、白き火打は聖女然たる魅力を持つ文化の日に登るにふさわしい山である。

今回は動物等の都合によりそれでは好まなからず、スから火打に登り三日の間に高野山に集合、翌スからとで乾杯しようではないかという事に相なった。そこでその結果は、

A・雨節山 登山 火打山 妙高山
田中 進・関 由美

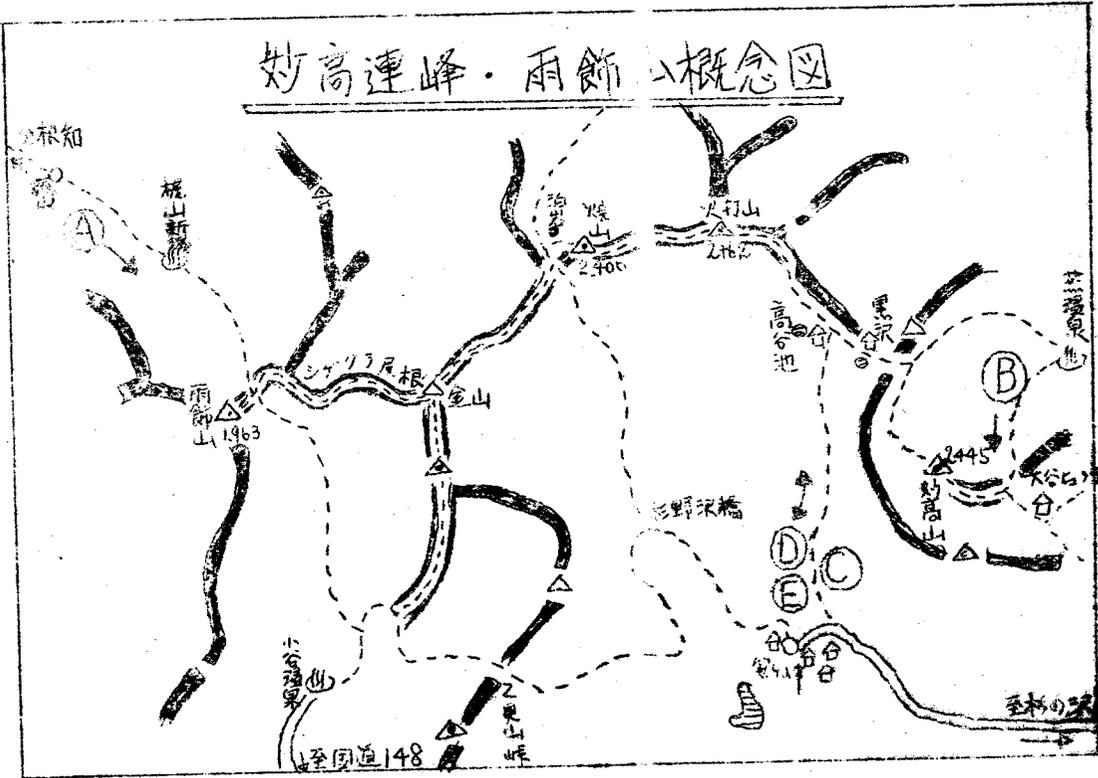
B・妙高山 火打山
小倉奈治 清水精一 橋本 歩 保坂智子

C・火打山 妙高山
高橋直子

D・火打山
丸山正夫

E・火打山(日帰り)
小林靖夫

妙高連峰・雨節山概念図



文化の日の焼山

朝日 9/11/33

参加者 田中 直

関 由美

※

初め降りた根知の駅、駅から少し離れた
 バス停に行くと直ぐにバスがやってきました。
 車中四・五人の登山客あり。昏、雨節である
 う。山口部落で降りて、紅葉の過ぎた谷あい
 の道をのんびりとゆく。晩秋の晴れわたった
 空は実に気持が良い。本直から硯山新湯へ向
 う登山道に入る。余り景色の良くない登山道
 を黙々と歩く。嫌気がさしてきた時、おおよそ
 硯山新湯の立派な建物が見えてきた。おおよそ
 山小屋と云ったイメージは全く旅館と云った
 感じの建物である。家の前に、首をつなぐれ
 た兎が数羽遊んでいた。関さんが嫌がる兎を
 無理天理抱いて、早く早急とせがむ。兎
 と一語に手ればき、と優しく見える……と、
 本能的に感じたに違いない。

先日、当会の〇〇さん達がダンスを興じた
 という広場で簡単な食事を済ませ去る。

その頃より空は曇ってきた。道には厚く落葉
 が積り、滑り易かった。調子の良か、尺体調
 の方も、舟声が多くなるにつれて体も回数も
 少なくなった。予定より相当遅れている事を認
 む。レディーに余り無理をさせてはまずいか
 な？と、荷物と少し持ち、てあげようかと云
 うと、「持ちます。」との反響あり、根性一
 こうやって、たくましましに身身してゆく
 のだろうか。

※

芭蕉の少し下で、雲海に映える夕陽をワッ
 トリと眺める。午の感覚がマヒする程の面
 い風の中で、ツエルトを張る。

朝霜で、困りは白く薄化粧。予定よりは
 かなり遅れていたが、雨節を登らないで行
 てしまふのもに残りがあり、遅れはある程度
 尻根筋で取り戻せるとの自信から、荷物を置
 いて頂上を往復した。海峯山塊を丘に見なが

ら、茂倉尾根を行く。前日と同じく庄は秋晴れなり。

最初は良かった道も、途中からマブコギ同然の道となる。一年以上も入山者がいないと、どうも荒れるのだらうか。屋々として直まな

い刺身に、次第に息りを感ずる。

十二時に予定している小塚氏との交信時間迄に金山に去るか、だが金山はまだ遠く、交信

は現在地が山の裏側となる為不能であつた。ようやく金山に着いたのが二時、さうして

JHのDSDを呼ぶが応答なし。瞬間からして高谷池へはともに行けようもなく、その事

だけでも連絡したか、だが今は、その望みも消え、便利な機械も無用の長物となる。

足取りも重く焼へ向う。今夜は泊岩に泊る事とする。爆発で荒れた泊岩に入り、囲りの僅

かな不々を集めて焚火で暖を取る。計画では今頃高谷池で皆と大いに騒いでいる頃なのに

……。皆の顔が浮かぶ。火打直迎之に乗こくれ。た若の丸山さん心配しているだらうな。

破れず残したケララーと、白いものが舞つて

男

……。今度のは冷えるぞ。

……。白い雪が降り、

……。白く雪が降り、

……。白く雪が降り、

……。白く雪が降り、

……。白く雪が降り、

……。白く雪が降り、

……。白く雪が降り、

……。白く雪が降り、

敗残兵の様な気持で歩く。昨夜が尻もちをつきながら無事峰に到着。最終バスに乗り込んだ。今回の山行はいろいろな面で計画の日々が、モロに出た山行であった。

％

直江津 6:38 未奥川 7:46 根知 8:25 山口 9:21 9:30
 嶺山新湯 10:00 中の池 16:00 笹平 17:40 8:31

％

笹平 6:40 雨飾山 7:00 海谷分岐 8:00
 氏倉峠 10:00 金山 14:00 泊岩 16:30

％

泊岩 7:00 境山 9:00 9:30 泊岩 10:30 10:40 笹平 16:20 17:00
 妙高平原 直江津



記田甲

高谷池より妙高へ 10/20

高橋直子

取具旅行もこのころに11月2日、直江津帯
 尾組の車に便乗して湯田中を去る。おかげで笹平峰を去るのは、予定より2時間も早く、10時20分であった。初めの登山靴に、よろしくお願ひします。と、足どりも軽い。おまけに上天気。笹平峰にすい分と足を置んだつむりだけ水と荒が見えるなんて初めのことである。11時里沢で早目の昼食をとる。カワイーと落葉を踏んで歩く山の様子、夏とはずかざり、マダマダ寒くばかり、13時30分高谷池にエッセイ。丸山さんの顔がみえたとてもううれしい。秋の山はひとりでは寂しすぎる。前日の疲れもある。昼寝を決めこんでいたのだけれど、気になることもある。火打取上へ向う。山頂からはすばらしい眺め。一面の雲海の中、直江津方面を向いて笹平峰を送ってくれた先生に感謝する。

雲の上に浮び上った。改アルプスにじぼしめと
れる。妙高も姿を現し、黒沢池あたりだろう
か霧氷が白く浮かぶ。ている。妙高越えの
人達はもう着いた頃だろうかと思ひながら寒
さと、飢えに耐えられなくなつて下山する。
頂上のすぐ下で雪鳥は羽にまがひ、コロコロ
と太つて、ヨチヨチ歩いてゐる。ヒュンテで
丸山さんに報告すると、雪の使い、という。
、まさか、と笑つた。外の外を見るとすでに
白いものがサラサラと落ちてゐる。夕飯会は
計らゝで昨夜に方々で大宴会？ お雑煮、焼
魚、お酒などいろいろになつて幸せい、はい
、モルゲンロートを期待しながら、時消灯と
なる。

11月3日ついにひとり、妙高をめぐること
になつた。夕少うらめしく火打の向こうを見
ながら皆さんの見送りを受けて、7時30分去
発する。先に去発したコ・コ組のトリースを
たどりながら、初めての雪の山道に心中穏や
かではなかつた。黒沢ヒュンテから長助谷合

は夏も通つた事がないので、トリースがなか
つた。そのまゝ、峰へと思つた。だけれど
、幸か不幸か、人程先に行つた様子、雪もあ
まりひどくなりそうもないので頂上に向う。
黒沢8時20分長助谷合、9時20分黒沢に下つた。
長助谷の急傾斜、絶対登りたくないと思つて
いたのに、ひとりブツブツ言いながら、登つ
てゐるより休みの方が長かつたように思う。と
にかく頂上に到着10時30分早くも空腹を感じ
て昼食となる。あんまり休んでゐると、青空
が見えてきた。それに気分をよくして去発し
7時30分、セ心と杖の空というもの早く退散し
た方がよさそう。鎖場より少し上でズックを
ほいた5人連れにまがひ、ズック組はせむし
りごとびくくりした様子、私もズックで、ほ
んど夏と変わらない身軽度になつて、くり、お互
いに心配しながらおれ違つた。天狗堂に組ほ
びにまがひ、たけれど、ほとんどが夏の姿に近
かつた。ごもりれり、下は紅葉ですばら
しい。天気なのだから、浮かれ、雪を見にく

るのも無理はないと……。大谷に「ッ」に道を
それてからはただひとり足跡ひとつない道を
履むらをつまびから道の平に下る。スキー場
はやっぱりよく滑る。スポーツウェアを着た時
20分のみひり着替えては時分妙高を原野新
で皆さんと再会する。振り返ると高谷の牧の
色の草やかさと対象的に頂上は白く雪にま
れて、すでに散しい冬の顔をしていた。

おわり

妙高、火打山 登山

橋本秀

北地獄谷経由で鷹杖の登山道を進むと胸つ
ま八丁が見えてきた。紅葉のあざやかさはほ
っと、ダリカンバが衣を脱ぎ捨て、がいの雪の
様な白い木膚を見せていた。落葉の、カサコン、
という音がなんとも淋しく、胸をキューンと
させる。紅葉は、鷹杖の山と渡去する前奏曲
にすぎない様な感じた。山は四季折々、いろ
いろな姿を見せてくれるけれど、全て鷹杖の

山を中心に回転している様だ。今回は、小倉
さん、清水さん、保坂さんと共に行動。
火打山は私の好きな山で、足繁く行つたが、
妙高山はいつも、遠くからながめている山だ
った。妙高は今回二度目の登山である。一回
目は高校一年の時、全校登山で何となく登っ
てしまった。その時の印象が余り良くなかつ
たのが一番近くにありながら、十年以上も足
を踏み入れることになかった。今回も火打へ
行く為の、妙高経由であると思つていた。し
かし、登つて見て、変化の有るすてきな山で
あることに気付いた。今年は、積極的に登っ
てみようと思い決めた。山頂は新雪で白く輝
いていた。天気は余り良くなかつたが、ガス
の切れ間から見える樹氷は、強く目に焼きつ
いた。黒沢池を通つて高谷池へ着き、楽しい
食事をして、床についた。
翌日は、ガス、ついで、火打が長く見えなかつた。道標を決めて、山頂へは行かず小屋で
みしてベリの花を咲かせていた。昨年は雷鳥
の雛を見、今年は是非ブロッケンを見た。

立山の七霊

誠中国新川群の立山—今でこそひらけ？

登山客でにぎわっているものの、かつては深山幽谷の峻岨な山としての趣があつた。

その頂には、立山権現があり、信仰の対象ともなつていた。この山の姿が仏像に似ているというところから、膝を一の截、腰腹を二の截、肩を三の截、頭を四の截、頂上を仏面とし、五の截としていた。

加賀の城下から麓まで一八里。麓には、立山権現へ参詣に行く人のための行人宿が、二十軒ばかり軒をつらねていた。そこに宿するに、時折、妖にして怪なる出来事が多いといふ。

夜半、にわかには小屋が震動するのだ。天狗のなせるわざかと、その時小屋にいる行人たちにはみな念仏をとなえ、死にたえんばかりの恐しさにふるえつつ、夜が明けのを待たず、登山する。

このほか、立山にはいろいろな怪異な出来事がある。たとえ、この山に願えば、思ひ人の七霊が影の様に見える、という俗説がある。

毛祿のことである。

江戸は牛込にすまいする小池何某という人、同行のもの三人して、この立山に登つた。

参詣のためである。無事、お参りもすんでその帰途に、路に迷い野宿のやむなきにいたつた。路辺の木陰に一夜をあかすことになつたのである。

あたりは真の闇。木々をゆるがす風の音だけが不気味に鳴りわたる。また、時がたつにしたがい、腹の虫もなつてきた。三人はなごやらず、一心に念仏をとなえていた。

そのときのことである。急に闇の中から、だれともしれず、

「これこれ、同行の衆よ、食事をさしあげよう。」

といつて、飯のうず高く盛られた椀を一つさし出す者があつた。

「こればかりじやない。」

どと何心なく小池は受けとり、三人がこれを見かねて食べたのである。空腹のあまり、いったいだれがだしたのかを考ふるゆとりもなく、腹に詰めこんだ。

やがて腹もおさまり、疲れをいやすことができた。残ったのは椀一つ。小池はそれをじつと見やうとした。思えば不思議なことではある。いったいだれがこれを……

さうこうするうちに、東の空が白んできて、朝日があたりをくつきりうかびあがらせてきた。あちころと見回してみたら、人里にはない。かの椀をかえそうにもかえすことができなかつた。

下ること一里ばかり。やうと五、六軒の人家が視野にはいつてきた。

「よし、やむをえない。あそこの一軒にこの椀をかえそう。」

小池は二人をともない、とある一軒の家に案内を乞い、昨夜の顛末を語った。

が、その家の主人はその話を聞くと、いふ

かしげな顔付で、

「そのあたりに、人里はないはず。」

「でも、この椀は……」

と、小池が取りだすのを見て、主人は顔色を変えた。

「え、それは、お詔の椀というのには、これみすか。」

「なにかわけも……」

「異なることがあるものみす。実は、この椀は向かいの家の息子のものなみす。せんでつて死んで、今日がその初七日……」

主人の意外な話に、小池のほうもかえり言葉とてなく、ただ椀を見つめるばかりみす。

主人は三人を連れてその家に行き、ことのあらましを告げたところ、両親はまたまた涙にくれ、三人に朝食を馳走して、供養したのである。

——『諸国聖人談』より——

予後多し難し分ちして

期日 5月30

参加者 山古木他及名

いし降り雨の日だった。こんは雨の日にも
入念して初めの山行、初めの冬山、ザイル
と便、た事もアヤピンまはいた事はない私
道貝も揃ってはいないので本当に登山者のかな
と。とても心配だった。

雨も長野へ来ると、うって変ってよい天気。
バードラインを登ってゆく。今度雪が4う
く降りていた。昔は雪がなくて訓練になら
ないのではなかつたかと、心配してはいたが私はず
と雪がなけ小ばいいな、と怒り続けていた。

しかし奥社には三々三々位り植雪があった。
雪を降りて懐小なり手つきで側の人に聞いて
や、とスバッシを着けた。その後全員で軍
角体敷、そして出発。

か、と山には登ってなかつた。そのころ、フカ
たが一生懸命前の人の役に働く。段々登り
か急になつてきた。戸隠にきたり初めてだ

だったので、とこへい、たら休憩中東のかしら
からなりので、とど一生懸命歩いた。山中岩
が崖木の様に安さ来た所で休憩し、シリニチ
をつないで作。たセルブストを着けた。カラ
グナをつけお登、そこがラウレ行、た所でア
イロンをつけた。それからザイルを使い、い
よし訓練。難し。ま袋が鎖にピタッと張
り付いて走り廻り、ザイルワークもよく出来
た。山頂中、往きはいい、とても、こん
な急な鎖場、もうして降りたらいいのか、帰
りの方も心配だったがしかし下りは懸水下降
で思、たより楽だった。

すべてが初めての山行、もうしたらいいのか
困りの人に聞き、いろいろ教えてもらって無
事下山、今でもよく登って降りてきたらと感
心してります。幾日前の説明会、そして道
貝を登り下さ、たみなさんのおかげでや、
と登ってこきました。今でもこういう時には
さ、と山には登ってなかつた。そのころ、フカ
たが一生懸命前の人の役に働く。段々登り
か急になつてきた。戸隠にきたり初めてだ

たが一生懸命前の人の役に働く。段々登り
か急になつてきた。戸隠にきたり初めてだ

か急になつてきた。戸隠にきたり初めてだ

記 白清光子

くやまない滝谷が荒涼として見えまじした。

滝谷を合から南岳西尾根テント迄は岳人の心を燃す滝谷、ジヤニグルム稜線上げ、地吹雪が舞っている。遠くには女性的な真白な笠

が、こんなに楽しい山行があつて良いものなのではないか、物達は神の楽園に足を入れ

たのでしようか、それと山の神様の歓迎なの、しかしこれがいい、たん荒れ去ると手が

つけられなくなり、目の前ノスエメートル先も見えなくなるのに冬山は本当に、生と死の隣

合わせである。

第三日目 5.5/11 (快晴)

南岳西尾根テント 30 オ一岩 稜線 8:45 9:25

オニ岩 稜線 9:10 10:00 南岳小屋 12:10 12:55 大喰岳 15:00 15:45

南岳小屋 16:45

天気は快晴だ、稜線は地吹雪を上げ、時々

の到着するのを待っている。テント場より少し行くと、やさしい雪壁があり、静しく登つて

行くと、オ一岩稜線に去りました。ここには残念ながら岩稜でのアイゼンの使い方が、余りう

まくない為、や、との思いで整りました。ち

よ、とこわが、たです。何か滝谷が私の心の技術を見抜いて、巧前の力では私の滝谷はや

れないと、云っているように、よくやしくて江方がありませんでした。

オ一岩稜から南岳小屋迄は小さな岩稜、小さなナイフエツダ等、楽しい登攀でした。

小屋より大喰岳迄の稜線上の風の強さ、地吹雪の痛さ、その後、周囲の全景の素晴らしい

曇りとつなは今日の天気、稜が地々を呼んでいる。しかし、知その体力は、もう限界の一步を前迄きつしまつて、いる。南岳の登りの若

しき、時間的に稜の往復は難しくなつてきている。我々は、大喰岳で引返したけれど、稜は

やはり去果した。しかし、稜の往復すると、小屋に着くのは、約20時に、な、て危険が増大する

、以、以は長く我慢して、大喰岳で引返してくればと私は思っている。

南岳の下りは三人で尻セードで下つて果ました。本當に楽しい、たです。又小屋の目の

前、大喰岳の峰が、心、冷汗をのびて

た。そして小屋に着いた時は体力、気力共使
い果し、小屋の入口から中に入る事し、しば
しの間お米まきしてした。

第四日目 5/12

自岳小屋(知念岳)の森原境界の山奥一岩壁の下
の400m 早小屋(知念岳)の白土コル小屋(知念岳)の
小屋

目を覚すと、地パイヤの黒線襪に重箱の蓋
絡み入っている。耳をたて、聞いてみると、
滝谷に落ちた一件と、文鏡の一件と計二件
の遺物らしい。文鏡の字は、怪物ほしている
が仔んとか彫けるらしい。小屋の中にいたR
CCCのパーテ並みに来たか？

パーテの人達が早くも救援の正産を、してい
る。私は後男が黙々と準備しているのを見な
がら、すごい速中だなど、上には上がっている
のだと感じながら、ふと残々のパーテが遺物
を扱いたら果して現在のうちの会で助けたく
れる枝量の持ち主が何人いるのかと一珠の不
安をいづく。折に、RCCCの遺中には名を

巻く、これは後からわか、た事だ付とども
滝谷に落ちた人間をRCCCのパーテが、滝
谷を登攀していたらしいのだが、その登攀を
急務を更して救助する。この枝量 早く残山
の谷もそのレベルに到達したいものだ。
さて、小屋から外に出ると、粗野五羽風20m
下りの麓線がわからなかつたが、Rの支着
冷静な判断のもとに、我々三人を送うことな
く下界迄昇っていくには、感謝する。
やはり冬山のR、Rに送られるだけはあると
、心の中で呟く、後は滝谷お合に、遺物有
を、おろした後の雪の上に、血が点々とつい
ていた。これを見ても別枝感じなくなっ、てき
ているおれも、あつたな。



記
山崎

私という人間

飯塚 ハ枝子

上蔵二びし山の会に入会してから、少しでも自然の雄大さ、美しさが尊いものであることが知ったようが気がする。余り会員みなさんて山行に参加しない私ですので会員相互の交遊は全然無いと云って良いくらいです。

例会にまじらず、会にも帯納して果して会員の資格があるのうと今頃疑門に思っているのです。今僕からはきさんとしたいと思つてます。

私の意味は 絵を描くこと、現在自分の心の余裕がなく筆をこつていません。社会人になつたばかりの頃 五月、連休に朝一番の列車にのり妙高の原の平イモリ池へ水はしよりの回遊を行つたことが懐しく思つています。あの頃がやほつとくうき敏があつたが、今は生活が質を妨げになつて若々しいので、今は自分の健康のことではあるけれども、あつたりのこと、冬はスキーで山中になり、スキー学校にやがて参加します。おどんの休みばかりだつた頃の思い出を、若い女性を見て半裁

で縛るものを互に捜して日常の着るものは自分で縫おうと製図を見てます。わりとお無精で買も自転車ですぐきまします。

私の心にもいつもある悩みは、人と話すことが苦なことです。例会に出た頃いっもそれを思つていました。自分を置く所がないのです。勝手な考え方とわかつてりても心の中にはいつも勝手な考え方があります。

近頃友人に私を人間からいなくなつたら良いのかしらと相談したところ、ある本を勧められたいです。まだ読んでいないのですが、いつでも読もうと思つていゝのです。ある本に書いてありました。生き甲斐と云ふのは常にひたむきな行為、自分の可能性をためてみよふという前向きな姿勢から生まれてくるものな、ということ。私にないことばかりで今後少しでも近づくと思つてます。

終あり

「職」の名称は、場合の

連絡事項の
「部」

隊は、中隊として編成されたり、連隊規模に編成された場合、力の増減に即座に対応し得る。尚、自衛隊の隊員は、隊員としての許りの訓練を受ける。その同一各隊員は、自衛隊員として、又連隊規模に編成される。と雖も、隊員としての訓練を受ける。て行なう。

一、隊員の名、年々、性別、住所

二、隊員の名、所属団体名、代表者名、所在地

三、連絡の要する先

四、隊員の名、日時、場所、地形、気象

五、隊員の名、原因、現象

六、隊員の名、連絡の要する先、連絡の要する先

七、隊員の名、連絡の要する先

八、医師、病院への連絡の要する先、医師の状況

九、隊員の名、連絡の要する先

十、今後、連絡の要する先

十一、通信機の有無と今後の連絡の方法

十二、文書保存者の氏名

連絡先は所属団体(協会)の会長、副会長、事務局長のうちの一人(所)として、地上に設置するものとす。

新婚さん

こんばんは

——杉本事務局長の巻——

11月23日に結婚された杉本事務局長のお宅を訪問し、おくさんをまじえて、サククバラン話を聞きました。(聞き手、丸山記者)

——山用語で、こんばんわ”を何んと言いますか。

△敏宏”やっほり”こんばんわ”ですぬ。

——それでは”こんばんわ”(奥さんにも

あいさつ) 昨年の11月23日の夜、登った山は、何という山でしたか?

△敏宏”久しぶりに上野の山に登りました。

アバックが多くて、でも寒いのですぐ下山したけどネ。

——このパークでしたア、きつね、きつね、たのは?

△敏宏”西郷さんの銅像下の階段ですネ。

——ピバークはどの辺でした?

△敏宏”イヤ——小屋へ何とかがたどりつきましたヨ。

——ひどい荒天だったそうは?

△敏宏”いいえ、むしろはネオン星がまたいて美しい空でした。

——明るく朝、陽がまぶしかったことでしょうか?

△敏宏”それはない、都会の太陽の色が眼にさめやかに映りましたネ。

——奥さんですよ。随分いけるんですって?

△定子”そうですね。単位はともかくいっぱい、はかるんですヨ。

△敏宏”たけしヤココネ。

——凹凸道を走っていたらと思ひ、オイノしかり運動せいかとどなったとか?

△定子”いいえ、内心とてもビクビクしながらお願ひ致しましたのヨ!

僕は好きですよ。やうしたサツパリした人。

《敏夫》イヤ——。丸山さんに好きにならねるとこまるなァ——。いい奥さんいるくせに。

——エノセ房ノあいはどうしたのかな？

《定子》奥さまはきつと私といっしょよ、美人で物静かな。大和なでしこ。タイムですネ。

しかし、奥さん。仲間を大事にする人ですよ。この杉さんは。僕らがこうして図々しく来ても様にならなかつしなない。
《定子》敏夫は左側の性性が強いのですから皆さんに来てもらうと心強いのではないかしら？。こめがらも、今まで以上に男性のすだけなくせ性の方も来てくたさいネ。

——ウチのセ房は、同行する倉のせめ子をやいているんだが、メタウは？

《定子》坂次も私も、外ではおおいにモテると自辨してますから、お互い様ですの。

《敏夫》内心はさうでもないやうだけとネ。

——丸山に精進しているやうだけど、ご家族の心境は？

《定子》テレ心なから山の遊離のニュースを聞くと、やはり心配ですネ。

——もつと精出して欲しい面があるのでは？

《定子》やう思んです。又、筆を山のように積み上げるのが好きで、紙のよがら。ともかた事が打込んでヨ（？）。

《敏夫》お島長に、仕方ないんだヨ。

——ウチのせめ子も、男の子とせの子を各一つずつ。た器用な夫婦がいるけど、がんばってくださいヨ。

《定子》子供役のことでは一致しないんですよ。

二人の意見が。どうなるんでしょうネ。

《敏夫》一人もいらないうんだから、こまっちやうにだよ。主人はほしいと思ってるのに。

——せめ子には、おそくなったのでこの皿で。今夜も荒い模様かな（？）。

好きものである。私はふと、この山の会は組織の中心がグレートと鑑賞してアランして開けたか、どうなのだろう。趣味、愛好会が終端であり、カマ愛好会だろうと云うことで入会してくる仲間が多数だ。たゞ、組織的要素は排除すべきである。組織の一環であってはならない。

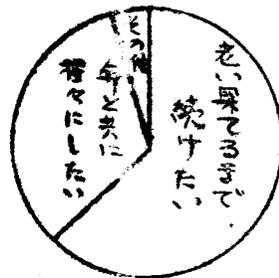
私は例へに出発される仲間が意外に多い事に不信を覚えアランして、結果として、大方、そればかりなのであるが、結果として、大方、出席している仲間だけの意見集約に終つてしまつた観が強く、非常に残念に思ふ。この更、原案に立ち戻る必要性を覚えたものである。まあ、それでもいわかるこの集まりの中で、活機のある人達の心の内をのぞけるものが給之だと思ふ。ただ、今の所、これが会々定例山行に対する考えろでなく、個人山行なりと云うものと云つた意見であるので、そこら私には判り切れないものがある。そこまご考ふんでは先にも書いた通りが、どう云う意味も含めて、資料の一節として保管願ひ、今後の

活動の進展に役立てて欲しい。

(集約結果)

一、今後あなたは

(一)山を

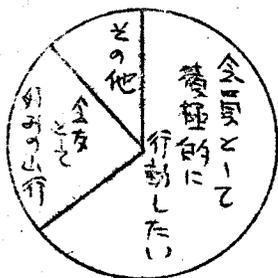


(二)その他

9.6、ちかな

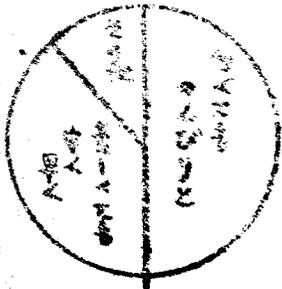
山を登水たかと思つまで

(三)会には



10 10

増進



大 減 額 入 入 入 入 入 入

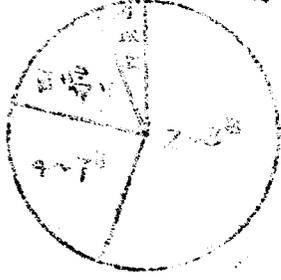
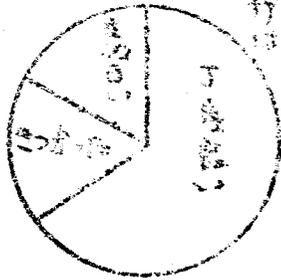
の 自 然 的 産 品 的 有 限

の 自 然 的 産 品 的 有 限

の 自 然 的 産 品 的 有 限

の 自 然 的 産 品 的 有 限

増進

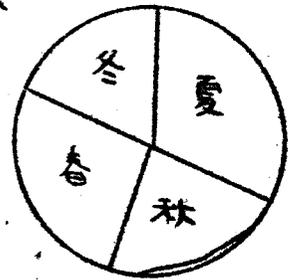


増進

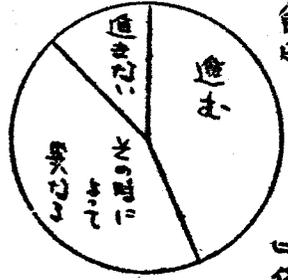
の 自 然 的 産 品 的 有 限

の 自 然 的 産 品 的 有 限

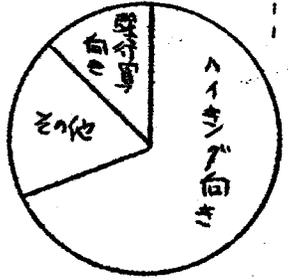
八、体力、服装、その他の条件により
行動可能な日は



九、山に入ると

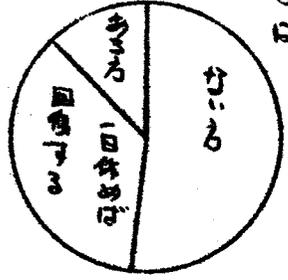


一〇、食生活



(四六ノ六歳)

一〇、体力は



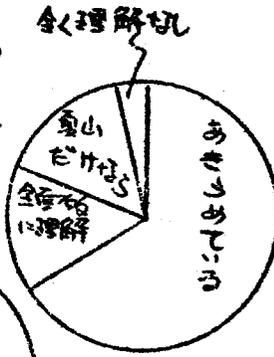
(四六ノ六歳)

スポーツが
あつちか
えびが
あ

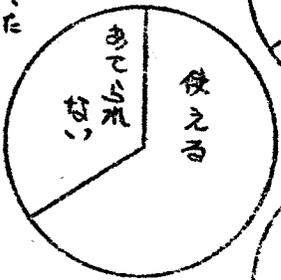
十、環境

ア、中位へ移行見込まない
イ、普通
ウ、ハイキングより少し上

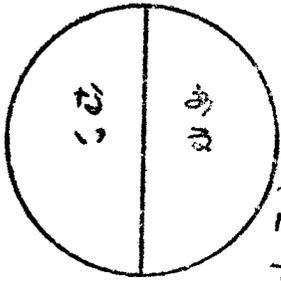
一、家庭での理解
二、職場



三、休日



四、他の趣味を
グループ活動



(ある)

a. 写真

b. 市民劇場、小伎劇場

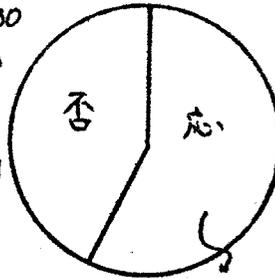
c. スキー

d. ムサフ

e. その他

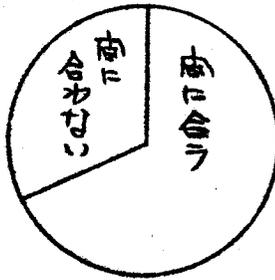
十一、例会について

一、山行打合せを例会で行うべきか



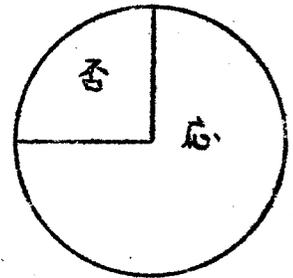
定期山行の時、
この法則もあり

二、630 南会に南に合うか



三、例えは登山まで踏打合せ、連絡等に使用

二、残りを山行打合せとする



四、前向、応の場合、山行打合せは参加者だけとするか



(その他)

a. 参加者と希望者へ不参加者

b. 自由

十二、その他

大変結構な、一冊、本さきか、
たの頁に載せる。

山の花

幽氣の最なかなればこそ
まぶたの奥々に
山野の彼らがにだまする

風と戯れる野原一杯のワタスゲの
白い波

髪型を 行く毎に表えていたチンクルマ
恋した乙女のように
恥じりりながら ぼくの心に忍びこみ
淡紅の花あをうつおかせたまま
幾度と逢わせたコイワカガキ
コバイケソウは

黒沢の湿地帯にも数多くありながら
他観にしても 総観にしても
遂に影像を成さなかつた
恋に似て
その戀いは辛い

手を差しのぐ 声かけてみた
ハクサンフウロ
目立たぬ花甘ればこそ
尊くものにあらずとも

せめて
もう一度だけでも逢いたいものだ

幸甚の色がでていないのに
あいつ

高谷の池でも黒沢の窪原でも
技がもろ殺していった
ギヤングタイワイチヨウさんよ
毒っぱよは花びらを

ヒヨロヒヨロ茎の先端にのっけている
あいつを

杖杖でバリバリ撃ちながら、てーまいる
ぼくは

炎紫赤の彩やかなハクサンゴザクラに
逢いたいのだから

霧の葉よりとばり近く
 さまよりの果てに滑りおるた谷あいに
 アオノツガザクラがいた
 ハクサンゴザクラの群れのなかに
 小さな葉っぱをのぼせるだけのぼして
 淡黄緑のかま首をもたげ
 幼き日のあいつをこくり
 擦りむいたほくろを笑ひまげていた
 小僧いやつ

流れる霧に湿める霞きのはい松の
 緑に赤く小さな点か浮いてた
 みーいじゃねエ花だ！
 オイ！
 はい松の花だぜ！
 その時の豊稔の友の翠
 どれよりか叫んだ時のお前の目さ。
 今でも友は笑ひニける

青いジャケットの学生を向こうに
 黄色の身の揺れは

幼な子の打ち振れる木枝のよらに
 彩やかに映えた

最後に登りのウサギギクの群れ

ああ

もう一度だけでも聞いたいもの

(きりぎりす・丸山)

(アンチート・一言)

・晩会は去年の晩会を道徳科で行なわれたが
 絶句こそ高田で行うべきだ。いあん今日は別の
 日に行うべき。

・ハイキング部のあり方について全場を話し
 合いが必要だと思ふ。今のままでは区別がは
 っきりしないのでは。

・連絡もうを整備してはどうか。いつも杉本
 さんばかりで、きのどくと思ふ。

・出欠票の作成はたいへん良いと思ふ。欠席
 の場合も向らかりの形で送らなくてはならない。

(アンチート・総案・実行員会) 卯文山

あしがき

高岡城跡の地は散・てしまいましたが山の
方はこれから春を迎えるというところでしょう
か。春山は雪も解けて歩き易く、普段行けな
い前でもスイスイ行けて楽しいものです。

新緑の山はどのみち一年中で一番良い季節
と云えるかもしれぬ。一番良い季節は又
一番良い季節、あしがきに心を引かれ
ていさまして。

松園紙部は現在、山行に近々お参りな
てのける様、松園紙部中をありがとうございます。

松園紙部と云うと何か堅苦しく考えがちですが
当会の松園紙部は会のポイントの如くわかりたりと
いうのが小生の願いです。

山の楽しさ色々おめとポイント生協の楽しさは
又格別です。羽に願ひ、報ひ、人生を語り、
山を語る、そんな楽しい松園紙部にしようでは
ありませんか。その後は、そうおなされたら
す。

八国中

つしぶし 第十号

発行日……S五十二年四月二十六日

発行……上越二ぶし山の会松園紙部

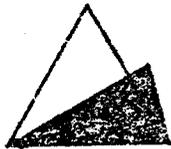
編集責任者……田中進

上越二ぶし山の会事務局

新潟県上越市東本町五丁目

一の三八 杉本方

電話 〇二五五(三四) 三七八七



JKAC